

はじめに

会長の宮さんから「寺田寅彦の光跡を求めて」というテーマをいただきました。多分、このタイトルの本（正編と続編）を出したからだと思います。主に『榊』に投稿した文章の転載で、資料集のような内容です。題名はかなり考えました。文字を大きく、写真を沢山入れたのですが、A4 でするので重たく、扱いにくいのが難点です。

発表資料をつくっていくうちに「団栗」のことが多くなり、副題に「団栗」を入れました。これは、

『榊』の私の好きな寺田寅彦随筆アンケートで、第一位に選ばれています。「坂」は道路の坂道であり、人生の坂です。その前振りとして、私と寅彦との出会い、友の会へ入った経緯などを雑話としました。

1. 寺田寅彦との出会いから友の会入会へ

高校に入って指定の学習参考書に関良一『私の現代国語教室』（昭和41、大修館書店）がありました。「案内者 寺田寅彦」という単元があり、寅彦の「映画芸術」のなかの言葉、「映画は芸術と科学との結婚によって生まれた麒麟児である。」を引用し、寺田寅彦自身が「芸術と科学との結婚によって生まれた麒麟児だった」と書いてあり、強く印象に残りました。今考えると「児」はちょっと違うような気がします。

学生時代には、ある先輩が『橡の実』にある寅彦の言葉「風呂の中の女の髪は運命よりも恐ろしい。」を教えてくださいました。昭和10年9月、『渋柿』に掲載されたもので、3カ月後には亡くなっているのです。

卒業後、昭和54年9月に母屋建て替え前の記念館を訪れ写真を撮ったのも今となっては思い出です。門の外から見ただけですが大きな木が鬱蒼と茂っていました。

友の会入会のきっかけは『科学朝日』平成7年10月号でした。「寺田寅彦～時代を超越するその精神・その科学」という特集が組まれていて、樋口敬二さんが書かれた記事のなかに、「高知市の寺田寅彦記念館友の会会員で、同市子ども科学図書館指導員である恒石直和さんが、雪の科学館を訪れた時のことを…」などとありましたので、早速連絡して入れていただきました。友の会発足から約1年後のことでした。

2. 『ホトトギス』掲載の「団栗」など10篇

「団栗」を含む10作品は『ホトトギス』に掲載され、後に『藪柑子集』にまとめられました。よって「藪柑子時代」ともいわれます。第百号の目次の一部を右に示します。

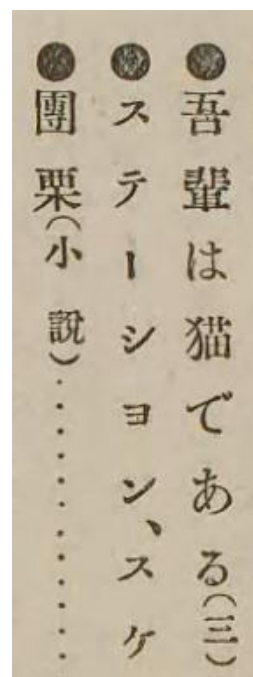
注目すべきは「団栗（小説）」と書かれていることです。写生文や随筆あるいは創作とは違います。上林暁は「団栗」は私小説の代表作と言ったそうです。

右ではカットしていますが、著者名は本名である寺田寅彦となっていました。夏目漱石の「吾輩は猫である」第3回目と同時掲載でもありました。

この辺のことは、山田一郎『『藪柑子集』の研究』が非常に詳しいので参考にしてください。次に10作品の表を作ってみました。



講演風景（若林章さん撮影）

『ホトトギス』
百号 目次

寺田寅彦 『ホトトギス』掲載作品（10 篇）

作品名 (目次による)	著者名		巻 号	年 月 (明治)	備 考 (年は明治)
	目 次	本 文			
団栗 (小説)	寺田寅彦	寅彦	8 巻 7 号	38 年 4 月	37 年 9 月、講師
龍舌蘭 (小説)	寺田寅彦	寅彦	8 巻 9 号	6 月	38 年 8 月、寛子と再婚
嵐 (小説)	寺田寅彦	寅彦	10 巻 1 号	39 年 10 月	
森の絵 (小説)	寺田寅彦	寅彦	10 巻 4 号	40 年 1 月	
枯菊の影 (小説)	寺田寅彦	寅彦	10 巻 5 号	2 月	
やもり物語 (小説)	寅彦	寅彦	11 巻 1 号	10 月	
障子の落書 (小説)	藪柑子	藪柑子	11 巻 4 号	41 年 1 月	
伊太利人 (小説)	藪柑子	藪柑子	11 巻 7 号	4 月	41 年 7 月、大学院卒業
花物語	藪柑子	藪柑子	12 巻 1 号	10 月	
まじょりか皿	藪柑子	藪柑子	12 巻 4 号	42 年 1 月	42 年 1 月、助教授

備考欄に簡単に書きましたが、寅彦が大学院生のまま理科大学の講師になり、大学院を卒業し、ヨーロッパ留学が決まって助教授に任命されるまでの、約 4 年間になります。途中から筆名「藪柑子」を用いたのは、悪口が聞こえてきたためかもしれません。

「団栗」は寅彦の長女・貞子さんが生れてから約 4 年後、妻・夏子さんの死から約 2 年半後の作品です。明治 38 年 8 月には寛子さんと再婚しています。「団栗」を書いて区切りをつけたのかもしれません。39 年 8 月の『ホトトギス』掲載の『吾輩は猫である』第 11 回では寒月の結婚が報告され、祝福されています。

3. 随筆と誤解される理由、表記の変遷

寺田寅彦といえば、科学者であると共に、随筆家というイメージがあり、「団栗」も随筆とみなされることが多いようです。その大きな理由は、小宮豊隆が編集した岩波文庫の『寺田寅彦随筆集』にあります。第 1 巻に「団栗」「龍舌蘭」「花物語」が入っています。後に書かれた多くの随筆とひとまとめにされてしまったのは、遺憾なことでした。非常に多く出たので、影響力が大きかったのでしょう。

「団栗」収載履歴をみると、寅彦の歿後すぐに出た全 16 巻の全集第 1 巻が「随筆一」でした。文庫の後にも『寺田寅彦全集随筆集』が出ましたし、新編集で刊行された全 30 巻の全集でも第 1 巻は「随筆一 創作・回想記」となっていて「随筆感」は残り続けています。現代に読み継がれている作品であり「小説」としてほしいものです。とはいっても「作り事」という意味ではなくて、都合の悪いことは書かないのが小説だと思います。

一方、表記をみるとネットで普及が著しい青空文庫は「どんぐり」です。アンソロジーなどではここからの出典が非常に増えています。変遷を調べてみました。

○団栗 ・初出『ホトトギス』(明治 38) ・『藪柑子集』(大正 12) ・『寺田寅彦全集』(昭和 11)

・〈岩波文庫〉『寺田寅彦随筆集』(昭和 22)

○どんぐり ・小型版(新書判)『寺田寅彦全集』(昭和 35) 後書に「現代の学校教育で習う文字の知識で読めるように現代表記にした。」との説明があります。

・〈岩波文庫〉『寺田寅彦随筆集』 昭和 38 年の改版でひらがなに追従しています。 ・青空文庫

○団栗 ・新編集『寺田寅彦全集』(平成 8) なぜか漢字に戻しています。一番据わりが良いのでしょうか。必要ならルビを付せばよいと思います。

4. 「団栗」のみつ坊は女兒だろうか、男児だろうか？

「団栗」（新版全集）から引用してみます。

……「あんな女の児が欲しいわねえ」と妻がいつにない事を云う。……

今年の二月、あけて六つになる忘れ形身のみつ坊をつれて、この植物園へ遊びに来て、昔ながらの団栗を拾わせた。こんな些細な事にまで、遺伝と云うようなものがあるものだから、みつ坊は非常に面白がった。…寅彦の実生活では、夏子さんとの間に貞子さんが生まれているので、ファンとしたら女兒と思う人が多いでしょう。妻の言葉に引きずられたかもしれません。しかし、何も知らずに読むと「みつ坊」から男児を想像するのが一般的なような気がします。「坊」は女兒にも使用することがありますが、少し無理があるように思います。

友の会会員で徳島大学教授の依岡隆児さんが授業に使用していたら、学生の解釈は男女両方あったそうです。また挿し絵を調査したら女の子が描かれていたともありました。（『新・読書のススメ』2022、徳島新聞社）

私も挿し絵のある本を探してみました。『私たちはどう生きるか2』（昭和33、ポプラ社）、『少年少女現代日本文学全集25』（昭和40、偕成社）、しもゆきこ『どんぐり』（平成8、ピーマンハウス）、DVD『学問と情熱 寺田寅彦』（平成17、紀伊國屋書店）に絵がありましたが全部女兒でした。寅彦の実生活も調べて絵を描いたのかもしれませんが。変わっているのは『ひとしずくの涙、ほろり。』（平成21、くもん出版）の扉カットで、団栗をつまんでいる右手だけの絵でした。

宇田道隆『寅彦先生閑話』（昭和23、弘文堂）に俳句の指導を受けている場面があります。〈昭和九年暮句稿〉で宇田の原句 団栗をつぎつぎに出すかくし哉 に対して 団栗を小さき指でならべけり と寅彦が添削しています。かくしはポケットです。この指は夏子さんだろうか、貞子さんだろうか、おそらく両方だと思います。昭和9年暮ですから死の1年前になります。「団栗」の描写を思い出します。亡くなるまで、夏さんの面影が心にあったのでしょうか。これは添削というより「団栗」の連想による別作でしょう。

渡辺正隆『科学の歳時記 どんぐりから宇宙へ』（令和3、教育評論社）には表紙も含めて興味ある絵が多数ありますが、団栗を拾っているのはやはり女兒で現代的な絵です。



『科学の歳時記』 山本美希の挿し絵

5. 貞子さんは植物園で団栗を拾ったか？

みつ坊のモデルとされる貞子さんは、本当に植物園で団栗を拾ったのだろうか、ということもよく話題になります。幸なことにご本人が書いています。「「団栗」の頃」（昭和24）から引用します。

「団栗」のみつ坊は植物園で団栗を拾っておりますが、私は当時、植物園へも連れて行こうという話があったから急に帰郷の日が繰上がった為、行かれずに帰ったように覚えております。併し私が団栗や椎の実を拾う事が大好きであった事は本当で、土佐の家から高知市街へ出る途中にあった大林区署に団栗の木があり、秋になると垣根の外へも沢山の実がこぼれました。祖母に連れられて町へ行く途中、そこまで来ると団栗を拾うので道草を食ひ、祖母を困らせていたらしいので、それを父が知っていて、みつ坊に植物園で団栗を拾わせたのでございましょう。

大林区署は高知城がある大高坂山の西側にありました。今は森林局になっているようです。やはり小説ですから、場面をうまく変えて構成しているというか、後にいう「モンタージュ」の手法でしょう。

6. 「団栗」の坂道

かなりの部分が実体験に基づく「団栗」ですが、この頃は詳しい日記が残っています。引用してみます。

明治34年2月3日(日) 晴

厚氷。風なくて暖なり。……鶯^{うぐいす}鳴く。昼より於夏を連れて植物園へ行く。戸崎町なる某寺の前にとぶらいの車並べり。温室には目なれぬ花卉^{かふい}咲きみだれて麗^{うつく}はし。池の水氷りたるに石投ぐる者案外に大人なるも可笑し。団栗^{だんり}数多拾ふて帰る。追儼^{ついでん}。厄^{やく}払ひましよ通る。年越しの蕎麦を取る。手品の話。芝居の話。湯戻りの手拭氷る。

この日は節分です。省略した部分もありますが日記に俳諧があり、そのまま作品になるようです。当時二人は西片町に住んでいました。小石川植物園正門までは直線で1km足らず、本郷台地や小石川台地があって坂が多いところですよ。一度下ってまた上って植物園に着きます。標高差は約12mですが、園内にも坂があります。日記にも「団栗」にも、歩いてとも車(人力)とも書いてありません。徒歩で行ったように読めますが、とにかく近いような書き方です。病身で身重(5ヵ月)ですし、雪駄(草履)ですから一緒に歩くだけでも大変だったでしょう。特に西片町西側の新坂(福山坂)は難所です。暖かい日であっても一番寒い時期ですし、仕方がなかったとはいえ、よく連れ出したものだと思います。作品にあるように、せめて美代と一緒にならばよかったと思います。もし人力車を使ったとしても、まだタイヤはなくて鉄輪ですから乗り心地は悪く、振動が妊婦に悪かったでしょう。



西片町の自宅から小石川植物園までの道と標高
(現在の地図でルートを想像したもの、グーグルマップ使用)

7. 「団栗」での表現、男中心社会

「団栗」から引用してみます。

この時始めて気が付いたが、なるほど腹の帯の所が人並よりだいぶ大きい。あるき方がよほど変だ。それでも当人は平気でくっついて来る。美代と二人でよこせばよかったと思いながら、無言で歩調を早める。植物園の門をはいって真直ぐに広いたらたら坂を上って左に折れる。…

[温室から] 早く外へ出た方がよい、おれはもう少し見て行くからと云ったら、ちょっとためらったが、おとなしく出て行った。

全文を注意して読めば、特に初出の文章では、今からみれば「男尊女卑」が残っています。当時としては、あたりまえだったのでしょう。『藪柑子集』(大正12)にまとめる時に少し修正していますが、やはり主人目線のような気がします。人物に名前が無く「病人」「妻」「母」とあるばかりで、筆者が「余」であるのも小説的です。子どもは「みつ坊」となっています。例外は「美代」で、当時のお手伝いさんの実名です。寅彦はチェーン・スモーカーといえるほどの愛煙家ですが、病者には紫煙は非常につらく、病気に悪かったと思います。

8. 「団栗」前後の日々、夏子の死

「団栗」の冒頭部に、「暮れもおし詰まった二十六日の晩……咳^{せき}をして血を吐いた」とあります。この頃は日記が無いのですが、明治33年12月でしょう。その後の日記を要部だけ引用します。

明治34年1月6日(日) 就床後も、美代が水蠟樹虫^{いばたろうむし}を刻む音。

31日(木) 阪井父上来訪。於夏の病気保養^{おんつ}の為帰国しては如何との事なり。美代里帰り。心細き夜なり。

2月3日(日) 昼より於夏を連れて植物園へ行く。(前述)

8日(金) 火鉢の上にて夏と指相撲。

9日(土) 四谷へ行く。阪井にて産期に入院の事など相談す。

10日(日) 九時頃目ざむ。昼より夏と浅草へ行く。花屋敷へはいる。…往復共上等の馬車にのる。

21日(木) 下宿へ荷物を送る。医師、家主其他へ払ひ、此家も今宵限りなりと思へば流石^{さすが}になつかし。阪井夫人、餞別の物など持来る。紫の肩掛け、道中の草履など。

23日(土) 六時二十分の汽車に乗る。四谷よりは母上、美か子、叔母上、井上よりは老夫婦送り来る…一時半頃浜松着…父上に面会。…美代の都合に就き別室にて相談。

24日(日) 四時頃父上にゆり起されて色々美代の事につき相談す。六時発の上りにて一全に別れを告ぐ。父上又汽車の窓迄来りて色々打合せをなす。朗なる日なり。…三時頃新橋着。安兵衛方にて休息し数寄屋橋より車を雇ひて四谷へ行く。一全留守。兄上のミなり。…母上、み嘉子つゞいて父上も帰らる。

25日(月) 夏等今夜神戸出帆の電報来る。わだつみも便なき此児を守らせ玉へ。

26日(火) 於夏安着の電報来る。

5月26日(日) 女子出生の報あり。 幸ありて桃の若葉と照り榮へよ

水蠟樹虫^{いばたろうむし}は何かと思っていたのですが、大町文衛『日本昆虫記』を読んでいると「イボタノムシは肺病の特効薬とされ、…」とあり美代の優しさが分かりました。咯血直後の不安や帰郷までの切迫した慌ただしさが伝わってきます。指相撲や上等の馬車で浅草へ行くなど、別れを惜しんでいる様子も胸を打ちます。

この頃、夏子の両親は東京・四谷に住んでいました。父・重季は陸軍少将で財力はあったと思うので、東京で良い医者に診せて、近くで養生させることもできたと思います。1月31日に重季が来て、夏子を土佐に帰すように伝えたのは寅彦の父・利正の意向でしょう。高知に帰すなら、母親がせめて利正へ引き継ぐ浜松まで、できれば最後まで送ってあげたら良かったのと思うのです。流産の恐れがあるし、何より舅と一緒にというのは気苦労だったと思います。美代が高知まで付き添ったのがせめてもの慰めかもしれません。

しかし、何といっても寅彦が高知まで同行すべきだったと思うのですが、感染を恐れて早く引き離したい父に、浜松以降を任せるしかなかったのでしょう。東京に帰って阪井へ行くと、一同留守というのも象徴的です。

寅彦は夏休みに帰省中、9月3日に肺炎カタルの診断を受け、休学して須崎で療養します。1年後、病気が回復して明治35年8月21日、桂浜に療養中の夏子を見舞った後、8月26日に東京に戻ります。日記を続けます。

明治35年11月15日(土) 夏夜十時死去〔鉛筆にて追記〕

16日(日) 午前四時夏危篤の報あり。次で六時絶息の報あり 十二時新橋発急行。阪井両上送り来る。

18日(火) 正午帰着。 19日(水) 埋葬。 26日(水) 出郷。

27日(木) 午前四時神戸着 午後六時の新橋行急行に乗る。

28日(金) 午前十一時着京 井上方にて休息 午後阪井へ行き夕方帰宿。

夏子が亡くなった時も両親は新橋で寅彦を見送るだけでした。葬儀に欠席するのは、冷たいとしか言いようがないと思います。利正に会いたくなかったのかもしれませんが。それでも寅彦は帰京後、阪井に挨拶に行っています。心の支えである漱石がイギリスへ留学中で、愚痴を聞いてくれ、慰めてくれる相手がいなかったのでしょう。

「国栗」の末尾に「始めと終りの悲惨であった母の運命だけは、この児に繰返させたくないものだと、しみじみそう思ったのである。」とありますが、まさにそういう境遇が続いていたのだらうと気の毒になります。

9. 夏子と住み始めた頃のこと

「団栗」は西片町に住んでいた頃のことですが、その前のことを中谷宇吉郎が書いています。『「団栗」のことなど』（昭和 23）から引用してみます。

二年生になって、奥さんが出て来られてからも、^{もいずみ}逢初町の汚い小路の離れを借りたり、仲御徒町の金貸しのばあさんの離れに移ったりされた。先生自身「随分流浪の生活をしたものだ。それが漸く西片町の家がいて引越しをして、やっと山の手の生活に入ったと思った矢先、妻が病気をして死んでしまったのだ。何故あんな不衛生ないやな所ばかり流浪して歩いていたものか、今思うと腹が立つくらいだ」と述懐されたことがある。

全集の年譜によりますと、夏子は上京の最初（明治 33 年春）から西片町に住んだようになっています。しかし矢島祐利は『寺田寅彦』（昭和 24、岩波書店）で 32 年 9 月 24 日以降に出て来た可能性もある、としています。

寅彦も「厄年と etc.」（大正 10）にその頃のことを書いています。

^{しちや}下谷のある町で金貸しの婆さんの二階に間借りして、うら若い妻と七輪で飯を焚いて暮して居る光景のすぐあとには、幼い児と並んで生々しい^{どまんじゅう}土饅頭の前にぬかずく淋しい後姿を見出す。

阪井は近くに住んでいたのですから、嫁に出したとはいえ、なぜ娘に住居の世話をしないのかと疑問に思います。陸軍少将ですから軍務が忙しかったのかもしれませんが、ちょうど日清戦争と日露戦争の間で、余裕があったようにも思われます。

10. 阪井重季との関係

阪井重季（しげき、しげすえ）との写真を紹介します。明治 43 年、ベルリンです。右側の寅彦だけの写真はよく見かけると思います。旧土佐藩の山内豊景がベルリン視察中に病気で入院した際、家臣代表で見舞いに来たのです。寅彦はすでに再婚していたのですが、付き切りで面倒をみていることが利正宛の手紙で分かります。

その後、寅彦は大正 6 年 7 月 1 日、学士院恩賜賞を受けたのですが、授賞式の参列者として「浜口兄上、阪井老人、陟、母上も列席。」と日記にあります。

浜口兄上は寛子の兄の^{しやうじろう}濱口昶二郎、弁護士です。阪井を呼ぶのは寅彦の義理堅さでしょう。陟は中城^{のぼる}陟（姉・幸の子）、やはり男社会です。寅彦の母思いはよく分かります。寛子は妊娠していたために遠慮したのでしょう。そして、この年 10 月に急死してしまいます。

大正 11 年、阪井は交通事故が原因で亡くなりますが、入院中に寅彦が酸素吸入などの世話をしたと夏子の妹・美嘉子さんが書いています。



阪井重季（左）と寅彦 明治 43 年、ベルリン

おわりに

寅彦の師が漱石であることは、よく知られています。「夏目漱石先生の追憶」には「色々な不幸のために心が重くなったときに、先生に会って話をしていると心の重荷がいつの間にか軽くなっていた。」とあります。逆に漱石も寅彦を敬愛していました。『吾輩は猫である』に寒月として登場させ、「先達で団栗のスタビリチーを論じて併せて天体の運行に及ぶと云ふ論文を書いた事があります」などと書いています。詳細は『猫』に譲ります。

これで終りです。中途半端で失礼しました。資料作成途中で〈私にとっての〉新発見がありました。こんな場合いつもそうですが、準備のために色々調べるのが楽しく、また勉強になりました。友の会の先人と、会長をはじめ会員の皆様に感謝です。ありがとうございました。

（2025 年 4 月 20 日講演）